

## 宿命を使命にかえて

久恒 啓一

横松宗先生と初めてお会いしたのは英国のロンドンだった。昭和五三年か四年だった。当時私（昭和二五年まれ）は日本航空の派遣員としてロンドンヒースロー空港に勤務していた。私はまだ二十代だった。あれから既に四半世紀以上の時間が経っているから、当時の先生は六十代の後半だったことになる。中津在住の父や母からの情報で横松先生の学識や人柄については既に知識があったから、初対面という感じはしなかった。郊外のウインザー城を案内したり、ロンドンで観劇や食事をしたりして、当時の英国事情や私が関心を持っていることをお話しした記憶がある。夜になって食事を済ませた後、私のボロ車が動かなくなると、先生に押ししてもらおう羽目に陥った。「航空会社にいるのに自動車の整備が悪い、あれで腰が悪くなった」とおっしゃっていたと後で聞いて申し訳なく思った。

帰国後、ほぼ同時期に結婚した私と弟の中津での披露宴にお招きした時、先生からは「なんだか、恩師になったような気がするなあ」との言葉をかけてもらった。

東京勤務の私は年に数回、帰省する折、父や母と一緒に横松先生ご夫妻を訪ねることが決まりのようになっていった。父はなかなか語り合う知己を持っていない人だったが、横松先生とは肝胆相照らす仲だったようだ。

一度父が「横松先生が、お宅のお子さんは気宇壮大でいいですなあと言ってたぞ」と愉快そうに伝えてくれたことがあって、恐縮したおぼえがある。

毎度、訪問する度に、中津の歴史、中国や魯迅研究のこと、時事問題に対する考え、人物論、福沢諭吉論などを聞いて、その学識ともものを見る眼に、私は自然に熟成するように尊敬の念を抱くようになった。

私は高校卒業と同時に中津を出ているから、中津という町のことは何も知らなかった。先生との交流の中から、福沢諭吉への関心が湧いて福沢諭吉協会にも入ったり、多くの偉人の出た郷里・中津という町の不思議さなどに目が開かれていった。このことはいくら感謝してもし過ぎることはないと思っている。

先生は「大正から昭和へ…恐慌と戦争の中を生きて」（河出書房）という自伝を昭和六四年に上梓された。私は「魯迅：民族の教師」（河出書房新社）という先生の著作も読んで、四半世紀以上の歴史を持つ中津の優れた同人誌「邪馬台」百一号に「福沢・魯迅そして横松」という小論を書いた。以下、その一部を引用する。

横松は福沢を高く評価する一方で、その限界にも言及している。しかし、明治という時代の中で生きる福沢の限界には優しい目で対応している。

横松は批判的精神の旺盛な人物であるが、本人が背負う組織などの制約や生きる時代の空気、時節の中にある限界などには暖かい目を向けている。福沢の場合も時代の子である部分、後世において批判の対象となった言説、行動などについては、それもある程度仕方のないものとして容認する度量を持っている。

横松が福沢にひかれたのは、福沢は学者は政権に従属すべきではなく、むしろ政治の指導と診断に当たるべきだという信念をもっていたことに共感を覚えたからであろう。

横松は、権力というものに常に深い懐疑を持っている立場を補強する考えを、福沢の著作に見出したからである。

そういう意味では横松は自分の人生を福沢に重ね合わせているといえよう。

福沢にとっての中津への郷土愛と較べると、横松の場合はその深さが深刻であることは間違いないであろう。十七、八才まで中津で育ったという点では同じだが、生涯を通して七回しか中津に帰ることのなかった福沢と、その後四十年以上にわたって郷土の政治、思想、文芸、教育などにかかわった横松とは愛憎の深さが違うと思う。自分を育てた郷土への愛着とそしてそれ以上に自分を絡めとっている郷土への憎悪の量はケタ違いにおおきいと推測できる。

その横松は郷里から脱出できない横松自身の生き方の回答を、福沢や魯迅の著作や実践に求めようとしたのだと思う。

横松がこの本の中で指摘している福沢の原点ともいうべき「郷土愛のパラドックス」は、より以上に横松に当てはまるキーワードなのである。

また、横松は自身の思想形成に大きく影響を与えた二人の巨人、福沢と魯迅の共通点を『魯迅：民族の教師』（河出書房新社）の中で次のように指摘している。

魯迅の故郷である紹興と中津は社会環境が酷似していた。水田工作の田園的風景に囲まれた古い城下町。そしてその中で、封建的人間関係の強く残っている古い街並みなど。

魯迅にとっての紹興はふる里であり中国そのものであったのと同じように、福沢にとっての中津はふる里であるが、それはまた日本そのものであったのである。

そういった育った社会環境に加えてさらにふたりの共通点として合理的科学精神をあげている。それは個人の自覚、個人の確立に大いに関係がある。また官僚主義反対という点でも両者は符節を合している。

まさに魯迅と福沢は横松の鏡である。

横松の自伝『大正から昭和へ』（河出書房新社）には、『福沢諭吉 中津からの出発』（朝日新聞社）で述べている福沢論を説く鍵があるように思う。

中津の山国川と金谷の土手、白堤防、水源地を愛する横松、気分のみさいだ時など、寸暇をみて金谷の土手のクローバーの上に仰臥する若き横松。こういった環境は私たちの時代（筆者は昭和二五年生まれ）とはすっかり変わってしまったと聞いてはいるが、同郷の私にも同じような体験がある。この本には実際に中津で育った者として望郷の思いを強くする記述がちりばめられている。

この『大正から昭和へ』は、大正デモクラシー、軍部の台頭、太平洋戦争などが横松の人生とオーバーラップしており、まさに生きた大正史、昭和史という内容になっている。

驚くべきことにこの本には書物や歴史の中に登場する偉人・賢人・豪傑などがきらめくように多数登場する。歴史上の人物が横松の人生行路にぞくぞくと現れてくる。この書を読み終えて、私は大正から昭和の時代を横松という一人の知性と一緒に旅した気持ちになった。読者としての私は、横松を通して中津を中心に歴史の中を紀行しているという感慨を持った。

歴史というものは本来こういう学び方をすべきものだろう。大正から昭和にかけての激動期に、これだけのひとかどの人物達に会いまくった横松には感嘆するのみだが、本人も言っているように「何でもみてやろう」という野次馬精神が旺盛な人である。書物で考え方を知るだけでなく、実際にその人に会うことによって理解をきわめようとする好奇心多き態度は参考になる。自分と異質の人物、はるかに優れた人物と会い続けるには多大なエネルギーが必要であるから、その総量も横松の場合多いのであろう。

その意味で横松の学問は書齋主義と現場主義を兼ね備えているのが特徴であると思う。自分より優れた国はないという不遜さが見えかくれする国家としての精神の鎖国、知的怠惰にも警鐘を鳴らし続ける横松の原点には、このような精神と行動がある。

また、同時代の人物だけでなく、ありとあらゆる書物をひもとき過去の時代の偉人や思想家と対話し、エッセンスをコンパクトに説明してくれている点もこの本の価値を高めている。

横松は自分の信念と相反することに煩悶をいだきつつ、しかしその中で自身の考え方を通していこうとする。常に自分の環境を利用、活用し知識を増やし、本来あるべき姿を模索し続けている。

横松は中国大陸においては侵略者の側に結果的に手を貸すことになるのだが、福沢の晩年における朝鮮、中国への強硬姿勢、日清戦争への支援などの行動は、時代の背景や空気、限界を考慮すべきであるといっている。

福沢の脱亜論の弁護は、自身の弁護でもある。

同人誌の使命は商業ベースをはみ出したものの中にいい質のものがあり、そういうものを育てることにあると横松は自伝『大正から昭和へ』の中で語っている。横松が四半世紀の歴史を持ち百号を迎えた地元の同人誌『邪馬台』に力を入れていたのもうなづける。このすぐれた同人誌への関わり方は横松の中津への関わりかたの一つの象徴でもある。

また、横松は、数年おきにあらわれる飛躍のチャンスをも自分以外の要因のため見送ってきた。可能性をひたすら捨て続けた人生であったといえよう。

まことに無念であろうと思うと同時に、その環境の中でもくさることなく精進、努力した点は見習いたい点だ。それは人間・横松宗の特徴でもある。

「私の小さな生命はこの書を通して、わが国の大地に投げ棄てておくことにした。」と横松は自伝の中でその真情を吐露しているが、ここに横松の壮絶ともいえる心構えが見て取れる。

人間の一生は短い。しかし、その人間の書いた文章の寿命は長い。その寿命を信じて横松はこのような表現をしたのであろう。

書物を著す目的は、人のためではない。自分の疑問点を晴らすため、自分と対話するため、自分を説得しあるいは自分で納得するために書くのである。私は『魯迅』『大正から昭和へ』『福沢論吉 中津からの出発』という三つの横松の著作を読む中で改めてそういう思いを強くした。

今大きく地殻変動を起こしつつある世界、ひとり繁栄の極みにありながら歴史への参画にためらいを見せている日本、そのような状況の中で「福沢が生きていたら大正、昭和（そして平成）を何と見たか」という横松の問いは、いまこそ大きな意味を持つのである。

この小論を先生が読まれて「自分をこれほど理解してくれた人はいなかった」と、当時住んでいた千葉の家に電話までもらったことも思い出深い。

いつの頃からか、先生は私にしきりに「研究者になりなさい」と勧めるようになった。企業に勤めながら本を書いたりしている私の動きを見ておられてそう勧めていただいていた。その頃はそういうことができるのかどうか半信半疑で聞いていた。その後、四十代の半ばになった頃、思いがけず宮城県の県立大学創立に当たって声がかかり、平成九年に早期退職して仙台で宮城大学に奉職することになった。このことを先生はこのほか喜んでくれた。そして、折に触れて、教育・研究のことや大学での役職の心得や処世術について学長経験者としての有益なアドバイスをいくつもいただいた。

平成十三年に父（久恒照智）が亡くなった時は、弔辞を読んでいただいたことも忘れられない。父の数少ない友人として、父のことをよく理解された弔事は本当にありがたいと思い、その内容はすべて私のホームページに入れてあり、時折読んでいる。<http://www.hisatune.net/html/05-career/private/titi.htm>)  
以下、その一部を引用する。

そのうち久恒さんは、生来持っていた向学の意欲おさえがたく、私たちの集まりにも出て、八六年（昭和六一年）からは「福沢諭吉を英語で読む会」に参加するようになった。この会は、福沢先生の唯一人の孫（当時）の清岡瑛一氏が、福沢の著書を英訳したものを学ぶ会で、まず福沢の教育論を学び、ついでに女性論を終え、十五年を経た今日は『福翁自伝』を輪読している。久恒さんは、始めて間もなく加わっていたように思う。

やがて、約二十人の仲間たちは、会合のあるごとに、久恒さんの博学と見識の深さにひきつけられるようになった。

だが、不幸にして、途中で突然脳こうそくにかかり病の床に臥すこととなった。その後は、夫人の看護を受けていたが、ときどき夫人の介助によって私の家にも訪ねてくれていた。私達のことばは十分に聞きとってくれていたが、みずからは自由に話すことができなかつたことが残念であった。

久恒さんは、もともと多くの書物を読破されていながらも寡黙で、かつ文章を発表することもきわめてひかえ目であった。その中で、夫人も編集委員として協力している同人誌「邪馬台」に二度だけ文章を寄せている。その一つは七三号（八四年冬号）で、他は七九号（八六年夏号）であった。実はこの二つとも私の著書と論文に関する貴重な感想であった。その中には、中国文学中最も難解とされている魯迅についてのものもふくまれている。それは矛盾多きがゆえに、それだけ深い人間性をもつ久恒さんでなくては不可能のことであるといえる。

ここに私自身の文章にふれることは、いささかおこがましくもあるが、久恒さんの評論を今改めて読み返してみても驚いたことは、私の文について語っているところが、そのままご本人自身を語っていることである。文中にはしばしば私のことばを引用してくれているが、それらは、一つづつ久恒さんの人間理解の深さと広さをもって私の文の意味を補ってくれているとさえいえる。しかも久恒さんを知っていなかったということをおぼされたのである。

「人生、一の知己を得れば足る」という諺がある。まことに人間にとつて、己を知ってくれる友を得るほど尊いことはない。これからこそもっと深いお付き合いをしてもっともっと互に啓発してもらいたいと念願していた矢先、かけがえない友を失ったということは、何という悲しいことであろう。

久恒さんが役所でどんな生活をしていたかは、私はほとんど知らない。だが、少し立ち入ったことにふれることを許してもらえば、職場の中では、久恒さんの人間性をほんとうに理解してくれる同僚は少なかったのではないかと想像される。それだけに、その余命を十分に花咲かせてもらいたかったと思うのは私だけであろうか。

だが人間の運命というものは、予め考えていたシナリオ通りに進められるものではない。人びととの別れもまた同じであろう。とくに肝胆相照らす人との出会いは、それ自身すばらしいことだが、別れることは、それにも増して何と苦しいことであろう。

平成十六年に、先生の九十歳の卒寿のお祝いの会が中津で催され、私も仙台から駆けつけた。そのとき先生は一時間ほどの講演をされて、その中で長寿の秘訣のようなものも話された。それは、仕事や人との交際を続けること、そして軽い運動と適度な飲酒というようなことだった。当日、新刊本「福沢諭吉」その発想の「パドックス」(梓書院)を参加者に配ったのには心底驚いてしまった。九十歳で著作を世に問うということの凄みを感じた。かくありたいものである。その記念講演で「丸山真男君らと一緒に研究会をやっていた」という君づけ発言があり、丸山氏よりも年上であるということも大変驚いた。丸山真男といえば日本の政治学の最高峰で、私自身すでに歴史上の人物として認識した。横松先生は、一九一三(大正二)年生まれだが、激動の二十世紀を生き抜き、平成の世の中のいま、高い峰にあって見晴らしよく歴史の流れをみているのだと感銘を受けた。

当日のお祝いの会には中津の各界の名士が多数参加されて、その影響力の大きさを改めて感じるようになった。この会では思いがけず乾杯の挨拶を頼まれた。

『人間の偉さは、人に与えた影響の大きさの総量で決まるのではないか。横松先生は、広く影響を与え、深く影響を与え、そして卒寿のお祝いの会が示すように今日まで長く影響を与え続けているから、もつとも偉い人である。先生が中津にずっと留まったことは先生ご自身にとっては良かったかどうかはわからない。しかし中津という町にとっては明らかに僥倖とでも言うべきことだった。今後もお元気で自伝の続編の「昭和から平成へ」を書いていただきたい』と挨拶をした。

昨年(平成十七年)の秋に中津に帰る機会があった折、母とともに金谷の新居に先生を訪ねた。体調が思わしくないと聞いていたが、当日はややお疲れの様子であったものの、いつものように話の輪に入ってくださり、夕刻になった

帰り際には玄関の外までわざわざお見送りいただいた。それが最後のお別れという予感が私にはあった。先生ご自身もそのように感じておられたのではないだろうか。

そして先生は十月に永眠された。私は仙台から弔電を打った。

『横松先生のご逝去の報に接し、巨星墜つ、の感を深くしております。先日の帰省の折に、母ともども先生の警咳（けいがい）に接することができましたが、今となっては最後のお別れができたとの想いがあふれております。

奥様には、心からお悔やみを申し上げます。

遠く仙台より先生のご冥福をお祈りいたします。』

先生は私が中国東北部の吉林大学（長春市）の客員教授になるなど中国に関心が傾斜していくこと、福沢諭吉を中心に中津という町に関心が深まっていくことを喜んでおられたように感じている。

先生はさまざまな文化活動を実践したが、素晴らしいのはそれぞれの分野に後継者を育て上げたことだろう。包容力があって暖かい人柄の先生の市民への教育活動は、「塾」のような趣きがある。先生に薫陶を受けた多くの「横松塾」の塾生の存在は、文化の香りを強みにすべき中津という町にとっては、かけがえのない大きな財産だろう。

「文部省は竹橋にあり、文部卿は三田にあり」とは福沢諭吉の偉さを語った当時の人々の言葉だが、横松先生は同じような存在だったのではないか。

私はここ一年以上、主として明治生まれで、明治から大正、昭和にかけて各界で活躍した人物を顕彰した人物記念館を訪ねる旅をしている。具体的には明治維新の前に生れた後藤新平から大正生まれの司馬遼太郎までというイメージだが、大分県では、朝倉文夫・瀧鍊太郎・重光葵・広瀬武夫といった人物群である。全国各地を訪ねてみると、風土が育んだ人物を風化させることなく、その仕事や精神を地域の財産として残そうとする動きも多いように感じている。

金谷の居宅の隣に建った先生の研究生生活を支えた蔵書を収納した重厚な書庫は、中津の文化の光を消さないために、横松宗先生の点した松明（たいまつ）を引き継ぐための基地として残す手立てをいずれ考えるべきだろう。